

かみす

Pick up

▶市長・議長から
新年のごあいさつ

特集

◆まちの魅力再発見◆

波崎の大タブ

樹齢1000年のストーリー

圧倒的な存在感。その姿は神々しくさえあります。神善寺境内にあり、樹齢1000年以上の巨樹。地域のシンボルであり、皆に愛され続けています。周りには、たくさん石仏が、なぜか木の方を向いています。新日本名木100選にも選ばれている長寿の巨樹・波崎の大タブの物語をひも解きます。

AR 広報かみすが
動き出す



[COCOAR]



アプリをダウンロードし
表紙にスマートフォンを
かざしてください。
詳細は18ページ

樹齢1000年以上、圧巻の巨樹

神善寺の門をくぐると目に飛び込んでくる波崎の大タブ。これでもかと大地にどっしりと腰を据えた迫力ある根元と、幹周りに圧倒されます。見上げれば、太い枝が空を覆うように張り巡らされ、「これが本当に一本の木なのだろうか」と驚くばかり。枝の一本一本も、まるで大木の幹ほどの太さがあり、重力に逆らって横へと張り出しているような不思議な感覚に包まれます。この見事な巨樹を、数歩離れてみたり、ぐるりと周り込んでみたりしながら眺めていると、時の経つのも忘れてしまうほどです。

樹齢は推定1000年以上、幹周り約8・1メートル、高さは約15メートル。昭和35年に茨城県の天然記念物に指定され、平成2年には新日本名木100選にも選ばれました。ちなみに「巨樹」とは、地上から1・3メートルの位置で幹の円周が3メートル以上ある樹木のこと。これは昭和63年、環境庁(当時)が初めて全国規模で巨樹・巨木調査を行なった際に定められた基準です。まさしく波崎の大タブは県内最大、全国でも有数の「巨樹」といえます。

神善寺と大タブの歴史

今回は、大タブの歴史や言い伝え、地域の皆さんとの関わりなどについて話を聞くため、波崎の舍利地区にある神善寺を訪ねました。寺の歴史は古く、平安時代の天喜4(1056)年、高野山から貞祐上人が十六善神の宝物をもって開山したと伝わります。県指定有形文化財の木造釈迦涅槃像、木造大日如来座像をはじめ、市指定有形文化財の釈迦堂、紙本両界曼陀羅、木造地藏菩薩立像、一石宝篋印塔、木版刷大般若波羅蜜多經600巻などを有する由緒ある寺です。



木造釈迦涅槃像

特集

まちの魅力再発見

波崎の大タブの

樹齢1000年のストーリー

神善寺の境内で圧倒的な存在感を誇る波崎の大タブ。「火伏せの木」という別名、木の周りを囲む約60体もの石仏、幹を覆う巨大なコブなどさまざまな謎をひも解きながら、地域のシンボルであり続けてきた巨樹に迫ります。



木造大日如来座像

タブノキがありました。長い間、地域のシンボルとして皆さんに愛され、よりどころとなってきた大切な木です」と住職の中山照仁さんが話してくれました。

昔は寺の境内は子どもたちの遊び場になっており、大タブの周りを元気に駆け回っていたようです。地域の皆さんの思い出の風景には、時代を超えてこの大タブの姿があることでしょう。

「火伏せの木」と護摩焚き

波崎の大タブは、別名「火伏せの木」とも呼ばれています。その由来を中山住職に聞きました。

「江戸時代にこの辺りで大きな火災がありました。大タブが火を食い止めてくれて、本堂が延焼せずになりました。それにあやかり本堂で火伏せの護摩を焚き、家内安全を祈願するようになった経緯があります。



木を見守るように並ぶ石仏

また、戦時中にも空襲による火災を防いでくれたことがあったと聞いています。昔の本堂は木造でしたので、もし大タブが守ってくれなかったら火の回りが早かったと思われる

す。火伏せの護摩焚きは約50年前まで、長年受け継がれてきました」

タブノキは常緑広葉樹であり、火に強い木とされています。潮風にも耐えるため波崎の地にしっかりと根を張り、1000年にわたって地域を守ってくれたようです。

大タブを拝む

お大師様

次に質問したのは、大タブの根元

樹齢1000年を超える巨樹・波崎の大タブ





に並ぶ石仏についてです。60体余りの石仏が、参道ではなく木の方を向いて安置されており、お参りに来た人



中山住職

ある巨大なコブについて中山住職に聞いてみました。

根元近くの幹が抱えるコブは、なぜこれほど

までに大きく膨らんだのでしょうか？

「木が長年生きている中で、鳥がついたり虫が入り込んだりと、さまざまな原因で傷がついて菌が侵入することがあります。そのときに木の抗体が菌と戦うことでコブができるといわれています。火災で焦げたときも、自分を守るためにコブが膨らんでいったと思われます。」

静かに大タブを見守り続けているお大師様は、長い歳月を経てお顔や刻まれた文字がすり減っています。しかし、今も色鮮やかな花が供えられたり、手作りのタスキが掛けられたりして、地域の皆さんに大切にされている様子が伝わってきました。

自分を守るため膨らんだコブ

もう一つ、波崎の大タブの特徴で



根元近くの巨大なコブ

もう一つの見方として、檀家さんに降りかかる厄災や悩みを受け止めた証しがコブとなって現れ、その都度大きくなってきたのではないかな？そう思うこともありますね」

巨大なコブに1000年を超える足跡が刻まれていると思うと、畏敬の念が湧いてきます。長年生きた木は、長寿の象徴でもあるといえます。

大タブの前に立ち、そこに宿る力を感じ取る静かな時間を持つことが、とても貴重に感じられました。

木を長生きさせるための管理

大タブの一生は、人間の一生とはまるでスケールが違います。老木といえども枝先までツヤツヤとした葉が茂り、太い枝には青々とした苔や草が生え、確かな生命力が感じられます。ただし「手入れをおろそかにするとあつという間に木が劣化してしまいます」と語る中山住職。歴代の住職にとつて、大タブを長生きさせることは使命の一つだったと言います。

例えば、太い枝を支えるため、かつては木製の支柱がありました。約20年前にコンクリート製の支柱に作り変えました。現在4本の支柱が立っていますが、そのうち1本は支える枝が折れてなくなり、支柱だけが残っています。

「大雨や強風、台風するときなどは



木造建築時代の本堂



現在の本堂。こま犬は当時のまま



朱塗りの釈迦堂。

かつては「木造釈迦涅槃像」が安置されていた

木が無事か気になり、こまめに見るようにしています。折れた枝が落ちると危険ですし、折れた断面から菌が入らないように適切な処置をする必要もあります。現在は樹木医に木の状態を診てもらったり、造園業者に適切に肥料を施してもらったりするなど、専門家の力を借りて大タブの維持に努めています」

子孫に受け継がれる命

神善寺の境内では、他にも大きく

育ったタブノキを何本も見ることが出来ます。実はこれらはすべて大タブの子孫なのだそう。

「どれも長年かけて自然に繁殖したものです。今も境内の地面のどこかで、芽吹いているかもしれません。こうして命がつながっていく自然の力は偉大ですね。人間も同じです。自分一人で生きていくわけではなく、ご先祖様がいたから自分がいるというのを忘れず、人のつながりを大切にしてもらいたいと思います」

そう語る中山住職の話は、さらに物の命へと発展していききました。「私自身、木の枝を払うことはありますが、根元から完全に命を絶つことは決してありません。例えば、皆さんが使っている机は木の命をいただ

いて日用品になった物。だからこそ、樹木を大切にすると同じように、物を大切にしなければなりません」

私たちは木造建築や木製の日用品、また薪などの燃料として、昔からたくさん木材を利用してきたことを考えると、樹木への感謝の気持ちを忘れてはいけなと改めて考えさせられました。

いろいろなことを感じさせてくれる波崎の大タブ。皆さんはその前に立ったとき、どのような思いを巡らせるのでしょうか。地域の宝として大切にされてきた巨樹に、会いに行ってみませんか？